

千刈狸の呟き

～ クマグスの宇宙 ～

孫七狸

南方熊楠—ミナカタ・クマグス—紀伊の国生まれの在野の博物学者。博覧強記にして天衣無縫、かのNature誌への掲載論考が51篇（単著としては歴代一位）、柳田國男と民俗学について議論を交わし、「中国革命の父」孫文とも親交があったというまさに「知の巨人」と呼ぶにふさわしい稀代の研究者である。昭和天皇とならぶ粘菌研究の第一人者でもあり御進講までしているが、進講が終わったあと、「ねえ、あんた！」と天皇の肩をポンと叩いたという話が伝えられているように、数々の奇行でも知られ、ロンドン滞在中には大英博物館で東洋人を侮蔑したと閲覧者のイギリス人を殴りつけ、出入り禁止処分を受けている（因みに同時代のロンドン生活で夏目漱石は鬱になった）。

この熊楠のライフワークというべき粘菌の研究はおよそ一世紀前のこと。「粘菌は動植物いずれともつかぬ奇態の生物にて（中略）生死の現象、靈魂等のことに関し、小生過ぐる十四、五年この物を研究罷りあり」と柳田國男宛書簡にある。彼は野外や顕微鏡の中の粘菌のふるまいを通して宇宙を貫く摂理・法則に思いを馳せて「宇宙万有は無尽なり。ただし人すでに心あり。心ある以上は心の能うだけの楽しみを宇宙より取る。宇宙の幾分を化しておのれの心の楽しみとす。これを智と称することかと思う」と親友への手紙に記している。

粘菌は『風の谷のナウシカ』にも登場し、ナウシカが「この菌には意思があるのか！」と叫ぶくだりがある。脳はおろか、細胞同士をつなぐ神経系もない単細胞のアメーバ状生物が迷路で最短ルートを示し、時間の記憶を持ち、ハムレット的逡巡を見せた後にある判断をする。これを北海道大教授の中垣先生は知性を持っているとしてNature誌に報告している。知性とは発達した大脳皮質をもつ生物だけが持つものという私たちの思い込みがあるが、その行動のメカニズムを突き詰めれば、「反応拡散系の不安定化」という数理の法則に至る。迷路を解くための原形質の流動も化学反応を伴う物理現象に他ならないのだ。極論すれば全ての生命活動は物理現象ということになり、私たちの神経が信号を伝える機序もこの見方によって解明されている。—はたして知性とは何か。

1953年のワトソンとクリックによるDNAの二重らせんの発見を嚆矢とする今日の生命科学は遺伝子研究の独壇場といえるが、奇しくもこの世紀の発見の前年、チューリングという天才数学者が提唱した「反応拡散原理」が生物のありようの源であるらしい。「しくみ・しかけ」ではなく、「ありよう・ふるまい」—知性の本質は内部の仕組みではなく外部との応答にあり。遺伝子だけでは説明できない、まさに生命のダイナミズムといえよう。熊楠の目にはこれが見えていたのではないか。最大で数メートルの大きさにもなり、環境悪化の際にはさっさと胞子になってやり過ごすという千変万化、融通無碍ぶり。中枢や司令塔もなしに全体が生き延びるために一つの定量を介して（パイの取り合いを通じて）全体の調和が図れるという自律分散システム。生物の問題解決方法の際立った特徴であるといえる。

さて、ネンキンといえは年金。最近でも高齢年金の不正受給を半世紀！（当の86歳老女の「よく覚えていない」には苦笑）、障害年金受給資格の格差問題に最近では情報流出、さらには社会保障費全体の削減が提言されるなど、社会保障費関連の話題には事欠かないが、これに限らず如何にして国民国家＝日本社会という生命体が生き延びてゆくのか、今こそ粘菌の賢さに学ぶ必要があるかもしれない。つまり絶対的なリーダーに従うよりも、成員一人ひとりのまっとうな知性の積み重ねに任せる方がうまくいきそうな気がするのだ。独善的なリーダーシップでは共同体存続の危機に直結しかねない。

晩年には自分の学問について「畢竟は何の役に立つべしとも思われず」と語っていた熊楠は、臨終の床で天井に紫の花が一面に咲いているのが見えるといい、医者と呼ぼうかという家人に「頼むから今日は決して医者と呼ばないでくれ。医者が来ればすぐ天井の花が消えてしまうから」が最期の言葉であった。自らも森羅万象の在り方を従容として逝くことを望んだのであろう。享年75。この国が太平洋戦争に突入して3週間後のことであった。

今も熊野の太古の森からクマグスの高笑いが聞こえてきそうである。